

巻頭言

図書館に期待すること

安曇野赤十字病院 副院長
中野 武

東日本大地震で被災された地域、そして病院の皆様には心よりお見舞い申し上げます。失われた文献図書、資料も多かった事と思います。皆様の一日も早い復旧を祈念いたします。日赤医学図書館でも被災地への文献支援サービスも始まっています。支援の輪は大変素晴らしく頼もしく思います。関係各位のご尽力に心より敬意を表します。

図書館に期待することを語る時に、これまでの自分の図書館との関わりについて考えてみた。思えば多くの図書館を利用してきた。もちろんそこで沢山の図書と出会ってきた。小学生のころ授業で図書館の役割や本の貸し出しの仕組みなど教わった思い出がある。そのあと自分で公民館の図書室に行き本を借りた。そのことが大人に褒められて、それから図書館が好きになったようだ。本を読むのが好きな、そして単純な子供だった。何冊借りたか（読んだかはともかく）のグラフがあって友達と張り合った思い出もある。それから中学校、高校では読書というより受験勉強に利用した。そして大学入学。授業や実習、クラブ活動で読書とは少し距離をおいてしまったが、旧制高校の面影を色濃く残した中央図書館の書庫に入るのは楽しみであった。大正

時代の建物と北杜夫や辻邦生も利用したであろう閲覧室の雰囲気が好きだった。学部生時代には医学図書館はあまり利用しなかったように思う。医者になって勤務した大学病院では医局ごとに雑誌が管理されていた。中央化されておらず不便だった。自分の教室の専門領域の雑誌以外は入手が面倒で、休日や平日でも時刻が遅くなったりすれば大変辛い思いをした。病棟医にとって日中から文献を読む時間的な余裕はなく、文献検索はもっぱら夜間や休日の仕事であった。図書館は何時でも開いていて使い易いことが大切だ。ポストクという研究職であったアメリカでは大学図書館は一部の祝日以外には毎日24時間開館していた。ラボから配布されたカードを使えば何枚でもコピーが出来た。コンピュータでの文献検索も初めて利用した。毎日位に到着するカレントコンテンツ他をチェック。研究室の他のスタッフがチェックした記事や雑誌は出来るだけ abstract だけでも目を通すようにしていた。ここから世界中の同じ領域の研究グループの活動、進捗状況も知ることが出来た。3年間足繁く図書館に通ったもう一つの理由は、1日遅れの読売新聞を読むためでもあった。ここで昭和という時代の終焉を見守ることになった。

さて日赤病院に来てからのことである。何

NAKANO Takeshi

故か最初はあまり文献を引用することはなかった。勉強の意欲が少し低下したのは事実である。経験したことのない病気に出会ったときや学会発表（と言っても専ら地方会での症例報告）には文献集めが必要であった。地域の大学の医学図書館や日赤の文献相互サービスは大いに有用だった。古い病院の頃の図書室では終戦後米軍が持ち込んでアメリカ文化センターなどを経て地域の病院に払い下げられた医学書の存在に気づいた。その貸出し票にあったお名前を糸口に、それらの図書をインターン時代に専ら利用されていた先生方との御交誼も生まれた。50年の時間を超えても、図書館を通じての本との出会いは、人との出会いも導いてくれた。これについては医事新報のエッセイ欄に掲載できたのも懐かしい思い出だ。また研修で利用した国立保健医療科学院の図書館についても思い出がある。プールの底のような地階の奥深い一角。時間が止まった空間。ふと目についた雑誌を手取る。本が呼んでいるという感じがした。紙資料から廃紙に次第に風化してゆくような状態の雑誌。製本するには欠落が多すぎたのだろうか。そこには文字に託された多くの想い、記憶があった。すべてのデータを電子化して残すことは出来ない。やがては廃棄

される運命の雑誌。そんな朽ち果てたような雑誌の記事から昭和30年頃の医療とそこで働いた人々の様子を生き生きと知ることが出来た。不思議な体験と出会いである。図書館は多くのものを与えてくれた。

さて或る学会の抄録のことである。「日本における医学図書館の歴史—戦前の大学医学部・医科大学に附属する図書館を中心に—」（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科堰向志穂）では次のように書かれている。「利用者が利用しやすいように資料を組織化して提供することで、Doctor of doctors といっても良い。医療従事者や研究者の縁の下の力持ちとならなければならない。医師が求める最新の情報をよりの確かつ迅速に提供することは、間接的な医療への貢献とみなすことが出来る。」（第25回医学情報サービス研究大会つくば大会での抄録を転記）。まったくご指摘の通りと思う。しかし医学情報の質、量面での爆発的増大、そしてその必要性、重要性を考えれば、間接的ではなく将に直接的な貢献と言うべきだ。

私は病院図書館、そして医学図書館員 medical librarians に大いに期待するものであります。